

暫定同居が正式同棲となり、幼なじみから恋人同士になって以降も、光嶋は相変わらず優しくなつた。

以前より束縛めいた言動はとられるけれど、彼にされる分には全然気にならない。

ふたりで暮らすにあたり、あらためて生活ルールを決めたり、苑実のベッドや寝具類をそろえたりするのも楽しかった。その延長で、今日は仕事が休みの光嶋と一緒に、自室用のルームフレグランスを買いに出た。

好きな海外ブランドのフレグランス専門店に行き、店頭には並ぶある商品を目にとめた苑実が隣の彼を見上げて笑う。

「崇成、バブルバス用のジェルなんだけど、どの香りがいい？」

「……おい。すでに買う前提か」

うんざりした口調で、悪夢の泡風呂と洗顔で咳かれた。

前回の浴室泡浸し事件でバブルバスジェルを使いきって以来、一応居候の身だったので家主に遠慮して利用を控え、風呂上がりのボディクリームのみ使用していたが、同棲を機に解禁でいいとの認識だ。

でも、念のためにつけ加えておく。

「もうあんなことはしないよ。ちゃんと適量しか入れないから」

「絶対だな」

「うん。一回やって気はすんだし」

「…気が変わらなきゃいいが」

疑わしそうに肩をすくめながらも、好きにしろと許してくれる。約束すると請け負い、光嶋の好みも聞き入れて選択に勤しむ。

「僕のお勧めは季節的にはこのウッディ系の香りかな。でも崇成はさっぱり系の香りも似合いそう」

「仕事に支障さえでなければ、なんでも」

そういう分野はおまへのほうが詳しいからと一任されて張りきった。なにせ、自分が彼にしてあげられることは限られている。

できる範囲で、普段世話になっている分も恩返しがしたかった。

「じゃあ、崇成がお風呂でリラックスできて一日の疲れがとれるように、やっぱりこっちにしよう。すっきりしてるけど少し甘さもあるし。ついでに、ボディクリームも買っとこ」

こんな感じの香りだと、光嶋の鼻先にボトルを持っていったら、了解というように端整な口元がほころんだ。

「普段、おまえからほのかにしてる香りだな」

「え！？ 僕、におってた？」

「…その言い方はどうかと思うが、この程度なら問題ない」

苦笑まじりにだが了承されて、早速ルームフレグランスもあわせてそれらを購入した。

その後、少し遅い昼食を摂り、彼の希望で書店へ立ち寄った。なにげない外出も、ふたりだったらすごく楽しくて笑顔が絶えない。

今後、家元を継いだり、フルリストの活動を始めてどんなに多忙になろうと、光嶋とのこうした癒しの時間だけはなんとしても確保したかった。

そして、最後に自宅近所のスーパーで食材を買う。なにが食べたいか訊かれたので餃子と答えたところ、帰るなりひと息つく間もなく、彼がキッチンで粉を何種類か混ぜて手で捏ね始めて驚いた。

「もしかして、皮からつくるの？」

「ああ。食感がいいからな」

「すごいね、崇成。そのうち、蕎麦とかうどんを手打ちしたり、ピザ生地もくるくる回してつくりそう」

「…あいにく、そこまでする予定はない」

「あれ」

ちょっと残念と冗談ぽく言いながら、横に並んで手元を覗き込む。できあがった生地をねかせる間、餃子の餡や副菜の下拵えも進める手際のよさは、いつ見ても本当に職人レベルだ。

いよいよ生地を細かく切り分けて円形にのばす段階で、苑実が満面の笑みで申し出た。

「ねえ。包むの、僕も手伝わせて」

「はいはい。その前に、風呂の湯を溜めてきてくれ」

「わかった」

手が粉まみれの光嶋に代わり、給湯スイッチを入れる。ついでに、さきほど買ってきたバブルバスジェルとボディクリームを脱衣所へ持っていった。

キッチンへ戻ってくると、彼はすでに餡を詰める作業に移っていた。

まずは手を洗い、五個ほど包み方をしっかり見て覚える。ひだをいくつか入れるのが難関だがおもしろそうで、いそいそと皮をてのひらにのせた。

ボウルに入った餡へ手を伸ばしかけて、餡をすくうスプーンがもうひとつあったほうがいいのではと思いつく。ふたりだし、そのほうがスムーズだろうと身じろいだ瞬間、左肘がなにかにあたった。

「あ」

転がり落ちていく麺棒とかいう調理器具を掴もうと、咄嗟に近い側の左手を出しかけたが皮を持っていてだめだ。間に合わないのじゃがみ込みながら今度は右手を差し出した際、光嶋に焦った声で名前を呼ばれた。

「苑実！」

「ん？ て、うわ！？」

直撃は免れたものの、頭部をかすめて袋ごと粉が落ちてきて少々咳き込む。どうやら、麺棒に意識をとられて、手を伸ばしたときに粉の入った袋を巻き込んでしまったらしい。

結局、麺棒もキャッチできないまま、髪の一部を白くさせて床に座り込んだ苑実が双眸を瞬かせ

る。

「あ～、びっくりした」

「む」

そばに膝をついた光嶋が、苑実の髪についた粉を払って苦笑するのに慚然とした。左手に大事に持った餃子の皮が取り上げられる。

「頼むから、なるべくなにもしないでくれるか。却って大変だし心臓に悪い」

3

「…僕は邪魔ってこと？」

「違う。おまえに怪我なんかさせたくないんだよ。手伝おうっていう気持ちはうれしいがな。おまえは、なににもできなくてもそばにいてくれるだけで充分だ」

「……っ」

さらりと甘い台詞を告げられて一転、頬が熱くなった。反射的に手をあてて冷やした途端、小さく笑われて眉をひそめる。

「なに」

「中力粉ついてる」

「あ…」

落とした粉にまみれた手でうっかり顔に触れてしまったようだ。慌てて払おうにも、両手とも粉まみれでどうにもできない。

困って彼を見つめたら、手早く周囲を片づけ始めた。そして、風呂に入るぞと促されてバスルームに連れていかれる。

キスしながら互いの服を脱がせ合い、全裸になって浴室に移動した。せっかくだからとバブルバスジェルを湯に入れ、ラベンダーの甘い香りの中で再びキスをする。

「っん…んん」

口内を舐め回されて舌を搦めとられ、同時に性器も扱かれて快樂に溺れた。温めのシャワーを頭から浴びつつ粉がついていた頬を拭われ、追い上げられていく。

ほどなく極めた苑実が、光嶋の身体に沿ってずると床にへたり込む途中、彼の屹立に気づいて、迷わず口に含んだ。

「おい」

即座にとめる光嶋は、この行為を自分はするくせに苑実にはほとんどさせてくれない。いつも彼がしてくれるみたいに気持ちよくなってもらいたくて、制止を振りきって懸命に頑張った。無論、大きすぎて全部は銜えきれないので、手も使う。

潤んだ瞳で上目遣いに光嶋を窺いながらの姿がどれだけ扇情的か知らずに奉仕し、離せという

のも聞かずにいたら、力任せに彼が腰を引いた。直後、避けろとの声に『へ？』と思った瞬間、顔へ生温い液体がかかって双眸を瞠る。

「あ……これ、崇成の…？」

頬を伝う光嶋の体液を指先にすくって眺め、小さく笑った。

「今日の僕は白いものに縁があるね。でも、どうせなら飲んでみたかったかも」

「……くそ。もう知らん」

「え？ つあ、ん…ふ」

突如、腕を掴んで立たされたと思いきや、壁を向かされる。次いで、尻を突き出す体勢をとらされ、脚を開かされたあげく、後孔にぬめった感触が訪れた。振り返って見れば、屈んだ光嶋が秘処を舐めていてうろたえる。

こればかりは何度されてもいたたまれず、嫌だと抗ったけれど、さらに尖らせた舌と指を挿れられて身悶えた。

弱い箇所を執拗に弄られて泣き出し、勘弁してと懇願する。体内から異物を引き出されて安堵したのも束の間、立ち上がって背後から覆いかぶさってきた彼に長大な熱塊を穿たれて悲鳴をあげた。

「あっあ…ん……崇成…や、あ」

「俺の理性の箍を外すからこうなる」

「な、に……ああ…っ」

耳朶やうなじを甘噛みされ、性器にもまたちよっかいを出される。最奥を突かれて泣き濡れたが、光嶋に激しく求められるのがうれしい苑実は本気で拒まない。むしろ、本能全開で己の体力も顧みずにいつもどおり感溺し、翌日は起き上がれなくなった。

苦笑う出勤前の彼に、そっとねだる。

「謝らなくていいから、崇成。キスして」

「ああ」

優しいキスと抱擁に、光嶋さえいてくれれば幸せだと満足な苑実だった。